挿絵画家としての金城安太郎

大　城　宜　武

要　旨

本研究の目的は、金城安太郎（1911年12月10日―1999年１月13日）の業績のうち、新聞小説の挿絵について検討することである。

金城安太郎は1951年から1969年の間に18作品の小説の挿絵を描いている。総数は4369点に上る。このうち、1765点が発見されている。金城安太郎は、「挿絵は小説と表裏一体である」と述べている。これが、安太郎の挿絵観の中心思想である、と考える。

はじめに

沖縄における戦後新聞小説の始まりは『那覇は蒼空』（山里永吉（作）、大嶺信一（挿絵））である。『沖縄タイムス』紙上で1951年７月７日より連載が開始され、同年９月５日、60回をもって終了する。

金城安太郎（1911年12月10日―1999年１月13日）の戦後新聞小説挿絵デビューは、1951年９月16日連載開始の『守禮の國』（石野径一郎・作）である。これを皮切りに1950年代矢継ぎ早に『沖縄タイムス』および『琉球新報』の新聞小説の挿絵を担当する。『琉球新報』の戦後初の新聞小説挿絵は金城安太郎が起用された（『郷愁』山里永吉・作、1951年11月10日～1952年２月23日、102回）。これら両紙に掲載された小説のうち18作品の挿絵を担当した。『平等所捕物控』（石川文一・作、1961年９月11日）を最後に以後新聞小説の挿絵を描かなくなる。

本稿の目的は、金城安太郎の1951年から1961年の11年間に亘る挿絵画家としての画業について検討することである。

1　金城安太郎研究の基本文献

金城安太郎の事績を総覧する文献につぎの４点がある。

① 新城栄徳（編著）1984「日本画家　金城安太郎」『琉文手帖』１号

② 金城安太郎　1994『金城安太郎作品集（日本画・水墨画）』金城安太郎

③ 新生美術編集部　2001「特集　金城安太郎」『新生美術』12号,pp.48-62.

④ 「豊潤の美を求めて―金城安太郎と高畠華宵」編集委員会（編）2009『豊潤の美を求めて―金城安太郎と高畠華宵』沖縄タイムス社

① は『琉文手帖』を主宰する新城栄徳による文献を博捜した、かつ金城安太郎の協力のもとになされた、金城安太郎研究の最初の文献である。『琉文手帖』のロゴは金城安太郎がデザインしたものである。

② は金城の第２回目の個展の図録である。原画に基づく図版は資料的価値が高い。

③ は新生美術協会が創設２０周年を記念し、回顧、現状、展望を特集したものである。具志堅聖児、金城安太郎、大嶺政俊、大嶺信一、宮良信威が追悼されている。

④ は、文化の杜共同企業体／沖縄県立博物館・美術館の企画展「豊潤の美を求めて―金城安太郎と高畠華宵」の図録であり、現時点で最新の研究成果が網羅された労作である。

④の企画展に関連して、金城安太郎の挿絵原画と版木が発見された。（『沖縄タイムス』５月21日）新聞連載挿絵原画1,765点である。表１に掲げた連載回数を合計すると4,369となるから約40％に当たる原画が発見されたわけである。

2　金城安太郎挿画作品リスト

金城安太郎が挿画担当として新聞小説に参画した作品リストを表１に掲げる。小説作者名、掲載開始日・終了日、掲載回数を示した。掲載回数は最終回記載に表記の回数を採用した。

「豊潤の美を求めて」企画展の準備作業として、中村　顕（2009）は『沖縄タイムス』『琉球新報』両紙

に掲載された「絵入り新聞小説」の調査を行い、その成果は『図録』に掲載された（pp.85－87）。本研究ではこれとは独立にマイクロフイルム化された資料について調査した結果に基づいて作品リストを作成した。ただし、戦後（1951年―1961年）に限った。

1951年から1961年の間に金城安太郎が挿画を手掛けた作品は18タイトルある。全18作品中、６作品が石川文一の作品であり、もっとも多い。『沖縄タイムス』紙掲載は12作品、『琉球新報』紙掲載は６作品である。『沖縄タイムス』紙では５作品が石川文一との仕事である。新垣美登子と葦間れつとはそれぞれ２作となっている。『琉球新報』紙では、山里永吉、田幸正平とそれぞれ２作品がある。両紙を通して現代物が６作品、時代物が12作品になる。

表１　金城安太郎新聞小説挿画リスト

	沖縄タイムス		琉　球　新　報	
年	作品名・作者等	回数	作品名	回数
1951	守禮の國（前編）（石野径一郎） ９月16日―12月29日	（102回）	郷愁（山里永吉） 11月10日―1952年２月23日 ↓	102回
1952			塵境（山里永吉） ４月11日―７月31日 宜野湾王子譚（第１部）（田幸正平） ８月５日―10月20日	110回 71回
1953	三つのもの（新垣美登子） １月13日―６月23日 東北季節風（みいにし） （春　尚之介、別名　富名腰尚武） 10月５日―1954年２月３日 ↓	160回 105回		
1954	新説阿痲和利（嘉陽安男） ５月10日―1955年２月21日 ↓ 黄色い百合（新垣美登子） ８月１日―1955年８月17日 ↓	262回 370回		
1955	南海の渦（石川文一） ８月18日―1956年１月５日 ↓	133回	うず更紗（嘉陽安男） ７月16日―1956年５月17日	290回
1956	大動乱（空手由来記）（石川文一） １月６日―12月31日	353回		
1957	二重潮（葦間れつ） １月６日―11月30日 怪盗傳（石川文一） ２月18日―1958年２月18日 ↓	313回 350回		
1958	和冠船（葦間れつ） ２月20日―11月１日 北山の秘宝（石川文一） 11月２日―1960年３月20日 ↓ ↓	252回 490回	琉球鼓（田幸正平） １月24日―９月12日 八潮路の為朝(石川文一) ９月13日―1959年８月28日 ↓	230回 341回
1959				
1960	平等所捕物控（石川文一） ６月１日―1961年９月11日 ↓	335回		
1961				

注記：日付は掲載開始日と終了日を表す。↓は掲載年がまたぐことをあらわす。

以下、連載中、第１回目掲載の挿画を掲げる。活版活字の関係で漢字と仮名の混じり表記があるが、新聞記事からの引用は、すべて原文のままとしている。

図１　守禮の國（1951　沖縄タイムス）

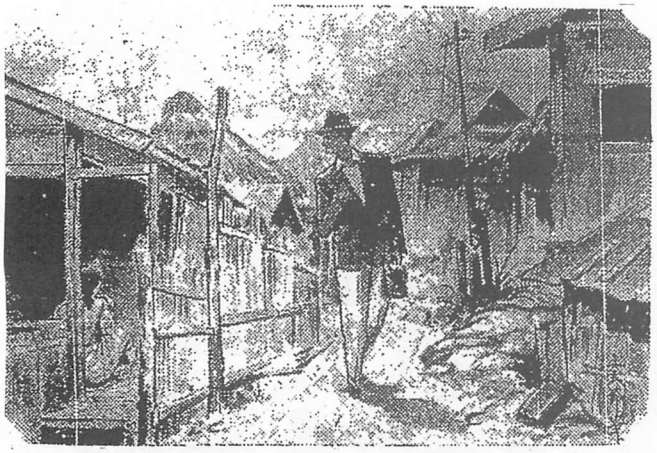

図２　郷　愁（1951　琉球新報）

図３　鹿　境（1952　琉球新報）

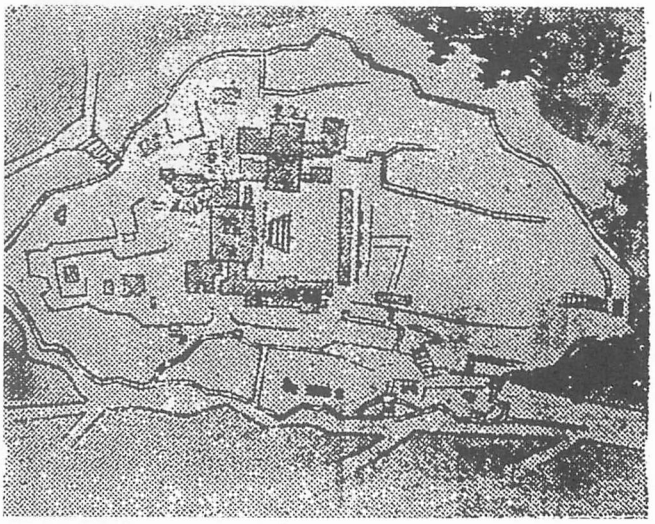

図４　宜野湾王子譚（1955　琉球新報）

図５　三つのもの（1953　沖縄タイムス）

図６　東北季節風（1953　沖縄タイムス）

図7　新説阿麻和利（1954　沖縄タイムス）

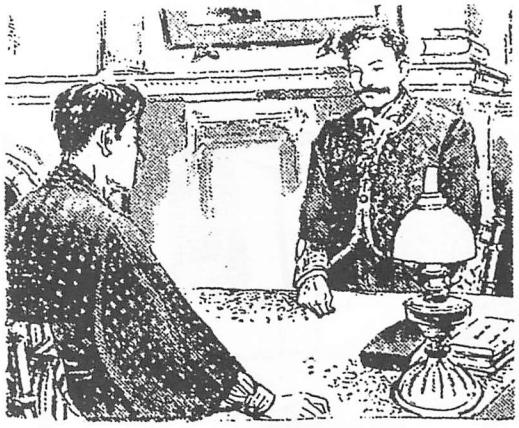

図10a　南海の渦（1955　沖縄タイムス）

図8　黄色い百合（1954　沖縄タイムス）

図10b　南海の渦（1955　沖縄タイムス）

図9　うず更紗（1955　琉球新報）

図11　大動乱（1956　沖縄タイムス）

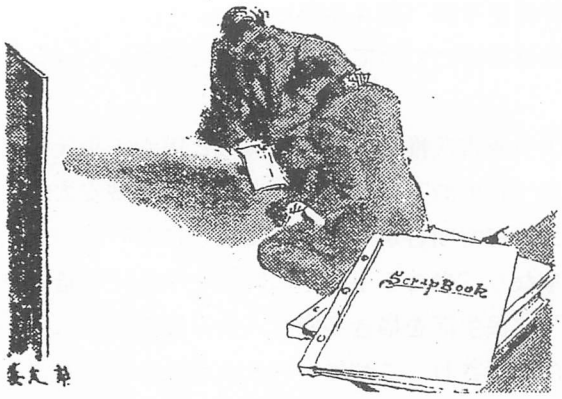

図12　二重潮（1957　沖縄タイムス）

図13　怪盗傳（1957　沖縄タイムス）

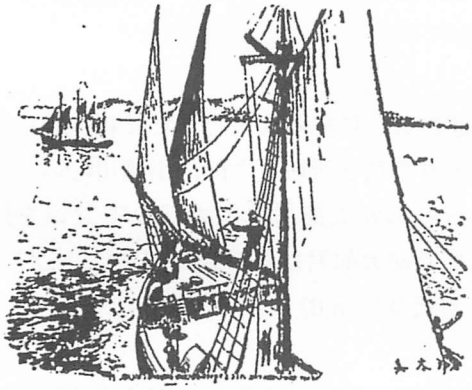

図14　琉球鼓（1958　琉球新報）

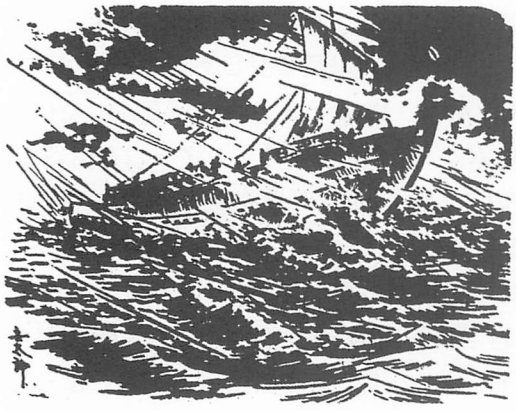

図15　和寇船（1958　沖縄タイムス）

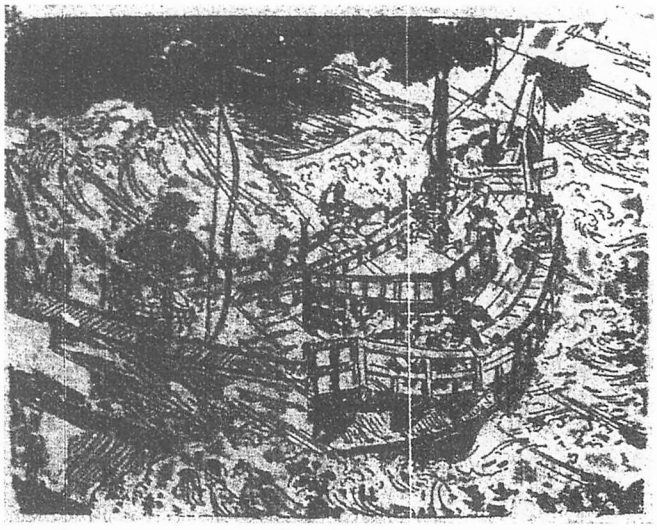

図16　八潮路の為朝（1958　琉球新報）

図17　北山の秘宝（1958　沖縄タイムス）

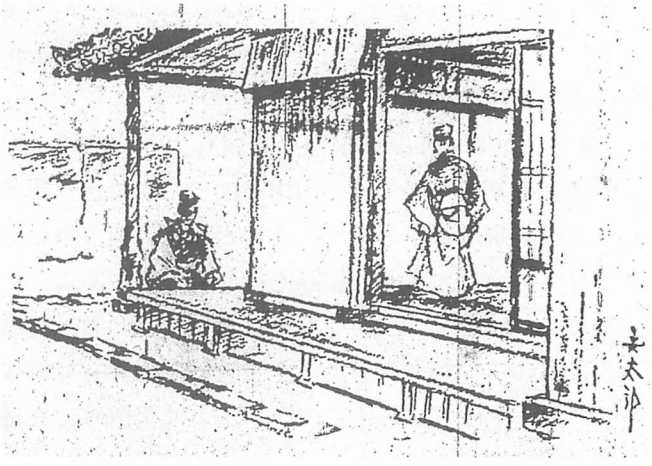

図18　平等所捕物控（1960　沖縄タイムス）

①守禮の國（図１参照）

安太郎戦後初の挿画の仕事である。木版画であった。原作者の石野径一郎は連載に先立ち、自作について３回に亘って文学論を展開していた。この間挿絵はない。

②郷　愁（図２参照）

『琉球新報』戦後初の新聞小説であり、かつ戦後初の写真製版による挿画であった。作者・山里永吉と金城安太郎とのコンビは戦前期から始まっていた。『熱帯魚』（1933年、昭和８年）がそれである。金城安太郎22歳の砌である。

『琉球新報』の新聞小説の連載予告として「挿絵の金城安太郎は沖縄唯一の日本画家で戦前戦後を通じて山里氏と協力して来られた」（1951年11月４日）と報じている。

連載を前に画家の言葉として「一五六年前山里氏とのコンビで、やはり当時の琉球新報に挿絵をえがいたことを想い起し喜びを感じている。」（『琉球新報』、1951年11月９日）と金城のコメントを紹介している。

この連載期間中の前半は『沖縄タイムス』連載の「守禮の國」と掛け持ちであった。時代物と現代物である。

③塵　境（図３参照）

『琉球新報』紙で引き続き山里永吉とのコンビになる仕事である。連載開始の前日、予告の画家の言葉として「山里永吉氏の新小説「塵境」の挿絵を描くよう依頼を受け喜びを感じているが責任もそれだけ大きいと感じている」（『琉球新報』1952年４月10日）を掲げている。山里とコンビを組んでの新聞小説の挿絵担当は本作が最後である。

中村（2009）は山里永吉と金城安太郎の挿絵に関する調査の結果「安太郎と山里によって世に送り出された連載小説は８作を数え、作者と画家の組み合わせ別で見ても、最も多くの作品を生み出していることが分かった」（同上）とし、「この両者は沖縄の新聞連載小説において、第一人者あったと言っても過言ではなかろう」（同上）と述べている。二人は戦前戦後を通じてコンビを組んでいた。

④宜野湾王子譚（図４参照）

社告は本作についてつぎのように予告している。

山里永吉氏推奨、護道院英こと田幸正平氏の歴史小説「宜野湾王子物語」はいよいよ金城安太郎氏とのコンビで明日から連載することになりました内外多事なり“尚こう王とその時代を中心に明暗織りなし”住民生活を描き多彩な人物と変転する人生が巧みに表現され、これに金城安太郎氏の挿絵もますます冴え必ず読者の愛読に応えると信じますのでご期待下さい（『琉球新報』、1952年８月４日）

本作連載第１回目はまだ、物語は始まっていない。作者田幸正平の本作執筆の事情が語られている。この回、首里城の絵図が掲載され、一気に物語への導入となっている。

戦前期、金城安太郎は山里、田幸との仕事が多い。これら三者には親交が深い。金城にとって山里、田幸は師であり、また田幸と山里は幼少時よりの知友である。小説家としては山里が先んじていた。山里永吉は、田幸の「護道院英」というペンネームの名付け親である。

新城（1984）は、金城と田幸の関係について次のように記している。

絵に進むことに絶対反対だった父親（松）通堂の仲仕の親方を私と新垣金次郎、小橋川という先生三人が住吉町の安太郎君の家を訪ねて父親を説得した。それで安太郎君は絵の道に進むことが出来た。（田幸正英氏談）（p.6）

金城安太郎は、田幸正平作『宜野湾王子譚』の連載予告で田幸について「一六七才の頃からの御縁で、絶対反対だった父を説いて私を絵の道に進まして呉れたのも先生です。云わば私の今日あるのも先生のお陰です」（琉球新報、1952年８月４日）と述べている。この頃、田幸は「田幸正平」のペンネームを用いている。その前のペンネームは「護道院英」である。その後「田幸正英」に変わる。田幸正平の本名は田幸正英である、比嘉正英と名乗ったこともある。教育者であり、その当時学校長であった（山里永吉、1952年８月４日、参照）。この度の連載は山里の推薦によって実現したものであるらしい（同）。

⑤三つのもの（図５参照）

新垣美登子はこの期間に３編の作品を『沖縄タイムス』紙に連載している。『未亡人』（1952、挿画は大城皓也）、『三つのもの』（1953）、『黄色い百合』（1954）である。後に未亡人三部作と呼ばれることになる。『黄色い百合』の連載予告で「挿絵はお馴染の金城安太郎氏、夕刊「阿痲和利」の挿絵と共に、現代、マゲ物両刀使い。初めての試みです」（1954年７月29日）と紹介している。この両刀使い掛け持ち仕事は、タイムスの『黄色い百合』と新報の『うず更紗』でも生じている。大変な売れっ子振りである。

⑥東北季節風（図６参照）

連載第１回は、平和通りの雑踏を描く。1953年の風景を切り取っている。横断幕に映画の宣伝が歴史的「現在」を写している。

⑦新説阿痲和利（図７参照）

第１回目の挿絵は、水墨画の如く漆黒の闇の中をカラスが飛んでいる様を描写している。このモチーフは、本作が単行本化されるにあたり口絵として使用されている。

⑧黄色い百合（図８参照）

作者の言葉として新垣美登子は次のように記している。

リリーイエロウ（黄百合）の花言葉は虚偽、悦楽、嬌態を示す。男女がふざける、おんなのなまめかしさ、愉快など私が今度書こうと思っている女の内容が丁度此の黄百合の花言葉にぴったりするので、この題をつけることにした。（『沖縄タイムス』、1954年７月30日）

ある法律家がこのタイトルに噛みついたらしい。法律的には「黄色いユリはユリではない」などありえない、という。これに対して英文学者の亀川正東は新垣を擁護している。

「ユリは白くて黄色ではない」というこの法律家の見解は、それが所謂「法網の密」というものであろうがしかしその白が黄色にも見え灰色にも見える所に文学的情感の深さがあるのではないか？（『沖縄タイムス』、1954年11月５日）

この問題に新垣は表立って反論はしなかったようだ。しかし、後年、本作が単行本化された際、「黄色い百合」の実例について言及している。新垣はつぎのように記している。

本稿が沖縄タイムス連載中上間編集局次長（現局長）を経て文化財保護委員会の多和田真淳さんから鉢植えの可愛らしい「黄色い百合」を贈ってもらった。

百合の花は白か赤とばかり思っていたのに、黄色い百合もあるものだと珍らしくもあり題名にちなんでいるので嬉しい贈物だと心から喜んでお受けした。（新垣美登子、1967『黄色い百合』　下巻　付記）

この時、挿画家金城安太郎には黄色い百合のどんなイメージがあったのか興味深い。金城安太郎は小説題目の肩に百合のイラストをあしらったことがあり、それは沖縄で春先に咲き誇るテッポウ百合のように見えた。

⑨うず更紗（図９参照）

時代物である。連載予告で、金城安太郎を次のように紹介している。

さし絵は前作「阿痲和利」とコンビであり、沖縄の時代小説のさし絵を書いては第一人者の定評ある金城安太郎氏が担当します。雅趣ゆたかな筆致は読者に日々華麗な夢を味わっていただけるでしょう。（『琉球新報』1955年７月９日）

金城安太郎は、つぎのような画家の言葉を寄せている。

久しぶりに琉球新報紙に新聞挿絵を嘉陽安男氏と組んで描く機会を得たこはうれしいことです。（同上）

幸い定評のある嘉陽氏の時代小説ですし、わたしも心をうち込んで皆さんの満足のいける絵を描きたいと念じています。（同）

マゲ物の女性の着物の柄について大きすぎるとのご注意を受けますがこれは限られたスペースで感じをだすために必要に迫られてのことです。（同）

本作は一時、『沖縄タイムス』連載の「黄色い百合」

と掛け持ちであった。

⑩南海の渦（図10a、図10b、参照）

連載予告によると、作者石川文一は首里の出身で千葉県在住とのことである。読売新聞社主催の読売新聞小説賞（昭和28年）の第一位入賞作品とのこと（『沖縄タイムス』、1955年８月17日、参照）である。琉球処分、廃藩置県の時代を扱っているので、実在した人物像の描写に金城安太郎は苦心したであろう。その成果が図11に掲げる主な登上人物である。

⑪大動乱（図11参照）

「南海の渦」に引き続き石川文一とコンビを組む。慶長の役すなわち薩摩襲来に時期を設定し、虚実取り混ぜた波乱万丈の時代小説である。石川自身は作者の言葉として「史実を経とし私の思いきった空想を緯とした時代小説にするつもりです。その意味では伝奇小説といえるでしょう」（『沖縄タイムス』、1956年１月４日）と述べている。「伝奇小説」という呼称も新鮮であった。史実にはない人物も登場するので、挿画家としては想像力が発揮できる機会でもあった。連載予告に画家の言葉は掲載されていないが「挿絵は多年歴史物を描き続けてきた金城安太郎氏が担当」（同上）と紹介されている。

⑫二重潮（図12参照）

つぎの夕刊小説の告知として金城安太郎は「挿絵は時代物に限らず、現代物にも才筆を知られ、挿絵画家として一家をなした」（『沖縄タイムス』、1958年１月４日）と紹介されている。画家の言葉は掲載されていない。新聞小説は初めての葦間れつは、執筆意図をつぎのように述べている。

太平洋戦争の敗北によって、台湾、沖縄、本土は混迷し、その混迷の中から思いがけない新しい運命のコースが現れてきた。おのおの異なった新しいコースと、この三つのグループの人たちはどのように相作用し、生きてきただろうか。私はそれを半ば歴史小説風に取り上げたい。（同）

戦後10年という小説世界と、戦後10年目の同時代的現実を連関させながら挿画としてこの同時代現象を挿画家がどのように描くか、力量が問われる創作作業である。沖縄、本渡、台湾の現在の切り取りに苦心があったであろう。

⑬怪盗傳（図13参照）

「傳奇小説連載」の告知記事は、「挿絵は石川氏と同様、その道30年、ますます円熟の境地を示す金城安太郎氏が担当します。」（『沖縄タイムス』、1957年２月17日）と紹介しているが画家の言葉は掲載されていない。作者の言葉は次のようである。

芝居でおなじみの義賊運玉義留や油食ボージャーなど面白人物たちを登場させるわけですが、私なりに運玉義留を、琉球のアルセーヌルパンへ仕立浦添王子刑死事件の真相追究させ神出鬼没の大活躍や、胸のすくような勧善懲悪ぶりを発揮させスリルのある読みものにしたい。（同）

⑭琉球鼓（図１４参照）

「琉球鼓」連載予告（次の夕刊小説）には作者の言葉として、田幸正平の衝撃的な言葉がある。以下引用する。

小説の筆をおいてから、もう六年になる　どうかと思ったが、本紙には前（その六年前）に宜野湾王子物語を書いて、途中で筆を捨てて、社や読者の皆様にえらい御迷惑をお掛けしたので、少々無理でも、その不義理の埋合わせをせねば済まぬという気持ちが先に立って、敢えて読者に再び、六年振りでお目にかかるわけである。
今度は腰を据えて書きたいと思う。
バズイル・ホールの大琉球航海記は小説そのままの歴史的文献だが、それを背景にして、琉球の人々の姿を描いてみたいと思ったのが筆を執らしめた大きな原因である（『琉球新報』、1958年11月１日）

この記述によって、前作「宜野湾王子譚」が不首尾に終わったことが分かる。前作の主人公宜野湾王子が即位し尚瀬王（しょうこうおう）時代のバジル・ホールの来琉と外交交渉の顛末を描いている。本作は後に出版された。あとがき（父のこと）で、娘の川副道子は、本作の執筆依頼が当時の編集局長・池宮城秀意で

あったことを明かしている（p.421）　田幸はその負託に応えることが出来た。

連載告知の画家の言葉で金城安太郎は、田幸正平との関係について言及している。以下引用する。

田幸正平氏と私は長年のお付き合いで挿絵を始めたのは田幸氏の小説の挿絵から始まったのであるがもうかれこれ三〇年になる。久しぶりに今回もまた縁あって氏の小説「琉球鼓」の女房役を担当させて頂いた。では、読者の皆様朝夕の御愛読をお願い致します。

アレアレ琉球新報社の連載小説「琉球鼓」の音がかすかにきこえているようだ。もーあしびーの鼓の音だ。スリチラを身に付け、こーがーきーして、スケッチブックをふところに読者の皆さまより一足先に読ませて頂きます。（同）

金城安太郎の高揚した気分が伝わってくる筆致である。「かれこれ三〇年」を逆算していくと1928年となる。これを遡ること２年の1926年に田幸とのコンビで「角を切られた鬼共」（『沖縄朝日新聞』）の連載がある。（新城（1984）による）　これが金城安太郎の挿絵の初作品であろう。金城安太郎15・６歳のころの仕事である。山里永吉とのコンビより随分早い時期からの親交が分かる。山里とのコンビ作品は「熱帯魚」（『琉球新報」、1933）が最初である。

⑮倭寇船（図16）

作者の葦間れつは作者の言葉としてつぎのように述べている。

子供にも、大人にも、楽しく読んでいけるもの、しかも文学という面から自分の良心を失わないもの―そのようなものを、慶長の役直前の琉球と大和の接触する時代の中で和こうを主題に書いてみたいと思っていた。（『沖縄タイムス』、1958年２月19日）

画家の言葉は掲載されていない。扱いも「挿絵は歴史では定評のある金城安太郎氏です。」とことば少なめである。前回葦間とコンビを組んだ「二重潮」は終戦直後の現代物であった。「歴史では定評のある」とは、現代物では難点があると表明したようなものである。「三つのもの」「東北季節風」「黄色い百合」、あるいは「郷愁」「塵境」等の現代物は顧慮されていないように思われる。

⑯八潮路の為朝（図16参照）

作者石川文一の琉球新報デビュー作である。タイトルから想像されるごとく源為朝が主人公である。連載予告で金城安太郎は次のように述べている。

時代が古い武家時代なのでさし絵も考証で苦労しますがそれだけに私にとって描き甲斐のある物ができると今から楽しみにしています。（『琉球新報』、1958年９月11日）

連載の告知記事で「滝沢馬琴の「椿説弓張月」の向こうを張る若き日の源為朝の波乱に富んだ物語を展開します」（同）と期待された作品である。滝沢の「弓張月」の挿絵は葛飾北斎が描いていた。金城安太郎は葛飾北斎に擬される。葛飾は金城にとって100年以上前の浮世絵師である。『琉球八景』がある。大変なプレッシャーであっただろう。琉球歴史物の挿画では定評のある金城安太郎が日本画の力量を発揮する機会を得たわけである。当時、沖縄画壇唯一の日本画家というのが金城安太郎像であった。

⑰北山の秘宝（図17）

今帰仁由来記に題材を採ったもので、作者石川文一は「題材はおなじみの今帰仁由来記だが、私が狙ったのは雄大なスケールである。これは日本の忠臣蔵や曽我の夜討にも匹敵するような、琉球唯一の復讐物語」（『沖縄タイムス』、1958年11月１日）と作者のことばとして抱負を語っている。画家の言葉は掲載がなく、「さしえは、金城安太郎氏です」（同）と言葉少なめの紹介に終わっている。ベテランであるがゆえに必要ないと考えたのであろうか。あるいは沖縄タイムス社において新聞小説における挿絵の位置づけに変化が生じたのだろうか。はたまた、金城安太郎が画家の言葉を遠慮したのであろうか、不詳である。

⑱平等所捕物控（図18）

本作は、金城安太郎の新聞小説挿絵の最後の仕事である。連作短編で一話あたり14，５回ぐらいの長さに

なる。平等所（ふいらじゅ）とは裁判所の事である。

作者の石川文一は「これに登場してくる名探偵は、玉那覇大筑（ウフチク）や、坊主御主と武士松村および、おなじみの琉球ルパン運玉義留と油食ボージャーである」（『沖縄タイムス』1960年５月31日）と述べている。画家のことばとして金城安太郎はつぎのように述べている。

こんどの作品は、編集部の意向で、短編物の連載とのことですから、さし絵も、その意向にそって三種に書き分けようと思っています。さて、その三種の書き分けが、どんなふうに描き出されるか、私もいま不安な気持ちですが、精一杯取っ組んでみたいと思っていますからどうかよろしくお願いします。（同）

以上の18作品のうち、確かに新聞小説ではあるが、体裁上新聞小説のパラダイムから外れた作品に、『怪盗傳』『和冠船』『北山の秘宝』がある。これらの作品は、新聞紙面左上に割り付けられている。ジュビナイル（少年少女）物の定位置と考えられる。すなわち、これらは若年読者を対象とする作品であると目される。子供にも大人にも楽しめる、などと紹介される物である。

歴史もの伝奇もの現代もの等、多岐にわたるジャンルの挿絵を金城安太郎は手掛けた。時代としては14世紀の源為朝、17世紀の倭寇、慶長の役（薩摩襲来）、バジル・ホールの来琉、敗戦直後から1950年代、の時期にわたる。

3　『守禮の國』と木版画

石野径一郎・作『守禮の國』の連載を前に、『沖縄タイムス』紙は石野からの通信としてつぎのような社告を掲載している。

“守禮の國”の挿絵は、今後琉球の歴史を扱った時代物を描く時、参考や手本になるというので日本の挿絵画家の間に関心が高く、既に石野氏に木下二助、（中略）現代一流挿絵画家から「小説が連載されだしたらぜひ見せてくれ」と申込まれているほどで“守禮の國”は連載を前に日本でも話題になっている。

（『沖縄タイムス』、1951年９月12日）

『守禮の國』の挿絵は木版で彫られた。戦後の物資不足の中、写真製版や製版機材が揃わなかったからである。『豊潤の美を求めて』企画展（2009年５月28日～６月28日、沖縄県立博物館・美術館）と関連し、金城安太郎の挿絵原画および版木が発見された（沖縄タイムス、2009年５月21日付け）。挿絵の版木を彫ったのは安慶名元清である（安慶名雅則、沖縄タイムス2009年６月３日付け）。安慶名雅則は安慶名元清の息子である。安慶名雅則（2009）は、木版画制作について次のように記している。

小説連載にあたり金城氏は石野氏の原稿を読んで場面をイメージ、挿絵を細い墨筆で和紙に描いた。この原画は霧吹きで適度に湿らせた後、裏返しの状態で版木に写し取られる。彫る作業は緻密な技量と相当な集中力が必要であっただろう。失敗は許されないからだ。なぜなら原画は一枚きりだからである。

板の厚さは鉋で慎重に削りながら活字と同じ高さに揃えられた。鉋くず一枚、コンマ１ミリの誤差が出るとうまく印刷できない。

活字と木版を組み合わせて日々の新聞を印刷せざるを得ない状況。（同）

金城はかつて、新聞小説挿絵の木版画制作に携わったことがある。新城栄徳（2001）に次の記述がある。

山里永吉氏は1933年４月の琉球新報に小説「熱帯魚」を書いた。挿絵の担当は安太郎さんで永吉氏は自伝の中で「さし絵入りの小説は沖縄の新聞としては初めてで、いまのように写真版がないので、金城安太郎君が毎日木版を彫ったものである。一枚の板を彫るのに一日がかりで安太郎くんはへとへとになり、あまり長続きはできない。最初のさし絵入り新聞小説は「熱帯魚」という題で、五〇回ぐらいだった」と記している。（p.55）

木版制作が手間暇のかかる大変な作業であったことが分かる。

『守禮の國』の連載は102回、見つかった版木は64点、残りはどうなったか。恐らく制作されなかった。次のような事情がある。

沖縄タイムス社は19　年4月27日からマリノニー輪転機を運用、同年6月19日に写真製版機を設備した。本来なら挿画を写真製版に移行する条件が整ったと見るべきだが9月16日連載開始の『守禮の國』の挿絵は木版である。版木を輪転機に組み込むのは困難であろう。同じ6月、平版印刷機を設備している（以上、牧港篤三、1969参照。）つまり平版印刷機によって、容易くはないが版木の使用が継続される条件も整っていた。何らかの理由で挿画の写真製版化に問題があったのであろう。『守禮の國』の連載66回目の挿画に網目が見える。つまり写真製版の印である。11月22日である。つまり、『守禮の國』は65回までは木版が使われ、66回以降は写真製版になった、と推測できる。図19（第65回）と図20（第66回）を比べてみよう。変化が認められるだろう。図20の図は網目模様が確認できる。写真製版の証拠である。連載66回目を含むそれ以降の原画が数枚発見されているので、木版画は第65回まで、第66回以降は写真製版に移行したものとみなしてよいだろう。

図19　守禮の國（1951　沖縄タイムス）

図20　守禮の國（1951　沖縄タイムス）

『琉球新報』の戦後最初の新聞小説は、山里永吉作『郷愁』である。1951年11月5日に連載が始まっている。挿絵は金城安太郎。しかも、戦後初めての写真版による挿画であった。琉球新報社は戦後のこの時期写真製版設備を有していたのである『琉球新報』は本紙連載小説予告の中で「本社では新聞諸施設を整備いたしましたので本月上旬をきし一面に新聞小説を連載、読者の御き待に副いたいと思います」（1951年11月4日）と社告している。この社告は「活字」が不十分なためひらがな代用が見られ、時代状況を垣間見せている。

沖縄タイムスの写真製版の運用が1951年11月22日頃だと考えられるので、『琉球新報』紙上の『郷愁』の挿画が沖縄における写真製版の最初であると推測できる。

大城立裕（2009）は「木版から網目に移行したのが、53年」（『沖縄タイムス』2009年7月1日）としていたがこれよりもっと早かったであろう。網目とは写真製版の事である。

4　金城安太郎の挿絵観

金城安太郎（1951）の新聞小説の挿絵観は『郷愁』連載予告の言葉に端的に示されている。

> 言う迄もなく小説は挿画と表裏一体のものであるから表現には充分留意し努力をして読者皆様への毎朝の美しき贈り物とする積りである。戦後初めての写真版による挿画であるので私も心を踊らしつゝ毎日原画をえがいている次第です。（11月9日）

嘉陽安男『うず更紗』（1955）の予告で金城は挿絵についてつぎのように述べている。

> 挿絵を描く時の私の願いは、少しでも小説の手助けになるように、また読者の夢の手助けになるように努力していくつもりです。（『琉球新報』7月15日）

挿画は小説と表裏一体であり、小説の手助けを心がけ、読者を強く意識し、読者を気配り、小説への期待を満足させようとする信念が感じ取れる。

自身新聞小説の書き手でもあった大城立裕（2009）は「挿絵はもともと、読者に本文を読む気持ちを起こ

させるためにあるのだろうと、かねがね考えてきた」（7月1日）と述べている。挿画が小説読みへの動機づけをするものとして位置づけられている。

新聞小説の挿絵画家は小説を一般読者よりも先に読む。小説家はその構想や思いを文章化し、挿絵画家は小説家の表現した内容を読み取り1枚の絵画に形象化する。その形象化作業は挿絵画家の小説理解ないし解釈の結果である。つまり連載のその都度の小説世界の表象化を実践しているのである。すると、小説は挿画と表裏一体であるというのは小説家への挿画の位置の主張だったかもしれない。

5　挿絵の独立

小説は挿画と表裏一体と金城安太郎は述べていたが、新聞小説が単行本化される場合は、挿画の数枚が口絵等で残されるほか全て除外されている。もはや、表裏一体ではなくなっている。むしろ挿画がなくても小説は自立出来ることを示している。金城が挿画を担当した新聞小説の何作かが単行本化されている。

石川　文一　1959『大動乱』前篇　花城書店
石川　文一　1959『大動乱』後編　花城書店
嘉陽　安男　1963『新説阿痲和利』　光有社
新垣美登子　1966『黄色い百合』前篇、(出版社不詳)
新垣美登子　1967『黄色い百合』後編、(出版社不詳)
田幸　正平　1992『琉球鼓』田幸正平著作刊行会

一般に挿画のみの挿絵「画集」は小説を再現できない。金城安太郎の描く新聞小説の挿画のみの単行本は出版されていない。新聞小説の挿画は、新聞というメディアに特有の存在である、ということが出来よう。新聞紙上で完結するのである。

おわりに

金城安太郎（1911年12月10日―1999年1月13日）は、画家であり、工芸家であり、彫刻家であり、版画家であり、舞台美術を手掛け、挿絵をよくした。総括すれば画人であった。16歳の頃から新聞小説の挿絵を描き、特に1950年代は挿画の絶頂期であった。約10年の間に18作品の挿絵を描き、時には同時並行に2作品を担当することもあった。その作品は雄渾、艶麗であり、他者の追随を許さないものがあった。特に歴史時代物ではその感が強い。琉球王朝時代の描写は秀逸である。しかし、1961年をもって新聞小説の挿絵描きから離れる。ただし、雑誌の挿絵を描いているので挿絵から完全撤退したわけではなかった。各種図書の挿絵や表紙絵などの業績がある。

戦前期の挿絵の業績については資料が散逸し、近づきがたいものがある。本稿では雑誌掲載作品は扱っていない。これらの検討は残されたままである。また、1950年代同時期の他の画家との比較検討も残された課題である。

参考・引用文献

安慶名雅則　2009「豊潤の美を求めて―版木が語る戦後新聞小説」『沖縄タイムス』6月3日
亀川　正東　1952「『黄色い百合』と法律家」（私の時評18）『沖縄タイムス』11月5日
川副　道子　「父のこと」　田幸正平　1992『琉球鼓』田幸正平著作刊行会　pp.419―421.
牧港　篤三　1969『新聞・沖縄戦後史』（沖縄タイムス社史）沖縄タイムス社
中村　　顕　2009「豊潤の美を求めて」下　『沖縄タイムス』6月6日
岡本美奈子　2009「豊潤の美を求めて」上　『沖縄タイムス』6月5日
大城　立裕　2009「新聞小説挿絵の思い出」『沖縄タイムス』7月1日
大城　宜武　2009「挿絵画家・金城安太郎の魅力」『沖縄タイムス』6月22日
新城　栄徳　2001「金城安太郎さん」『新生美術』12号 pp.54-58.
山里　永吉　1952「よき歴史小説作家―田幸正平を紹介する―」『琉球新報』（8月2日）

『沖縄タイムス』『琉球新報』1951年～1961年は、沖縄県立図書館、琉球大学附属図書館、那覇市立図書館、各館所蔵のマイクロフィルムを利用した。

付　記

本稿で引用転載した金城安太郎作品の図版は、沖縄タイムス社、琉球新報社の提供によるものである。また、転載をご許可下さいました金城一夫氏（金城安太郎氏の子息）に感謝申し上げます。

沖縄タイムス掲載の挿画	琉球新報掲載の挿画
図１：守禮の國	図２：郷愁
図５：三つのもの	図３：塵境
図６：東北季節風	図４：宜野湾王子譚
図７：新説阿痲和利	図９：うず更紗
図８：黄色い百合	図14：琉球鼓
図10a、図10b：南海の渦	図16：八潮路の為朝
図11：大動乱	
図12：二重潮	
図13：怪盗傳	
図15：和寇船	
図17：北山の秘宝	
図18：平等所捕物控	
図19、図20：守禮の國	

本稿は、沖縄文化の杜共同企業体／沖縄県立博物館・美術館の企画展「豊潤の美を求めて―金城安太郎と髙畠華宵」関連で開催されたシンポジウム（「画人・金城安太郎」、2009年６月14日、於沖縄県立博物館・美術館）に基づくものである。岡本美奈子（沖縄文化の杜）学芸員に便宜を図っていただきました。記して感謝申し上げます。

Kinjo Yasutaro: the Artist's Approach as an Illustrator

Yoshitake Oshiro

Abstract

This paper closely examines Kinjo Yasutaro's illustrations for newspaper novels. Among his many other artistic achievements, Kinjo began illustrating newspaper novels at the age of sixteen. From 1951 to 1961, Kinjo illustrated 18 novels. His work ranges from contemporary themes to historic ones. In all, Kinjo illustrated over 4000 pieces of which only 1765 are extant. The artist suggests that both the novel and the illustration itself represent "two sides of the same coin." We believe that this aphorism is central to the artist's approach to his work as an illustrator.